

Jan. 2018

ZENBI

全国美術館会議機関誌

January 2018 [Vol.13]

美術品管理システム Artize MA

NISSHA 独自のアーカイブ構築ノウハウから生まれた 収蔵作品（資料）管理のための高機能データベース

「Artize MA（アルタイズ・エム・エー）」は、NISSHA の高級美術印刷への豊富な取り組み経験やデジタルアーカイブ構築ノウハウから生まれた「収蔵作品管理」「収蔵資料管理」のための高機能データベースシステムです。



豊富な基本機能と柔軟なカスタマイズ

あらゆる美術館・博物館の作品管理業務への対応を考え、豊富な機能を基本パッケージに盛り込みました。個別ニーズに合わせたカスタマイズにも柔軟に対応でき、短期間でスピーディなシステム導入が可能です。

ユーザーごとのアクセス権限を詳細に設定

ユーザー管理画面から利用者のアクセス権限や作品情報の公開・非公開が設定可能。貴重な情報のセキュリティ保持も万全です。

高精細な作品画像を専用ビューアで閲覧

「Artize MA」に登録された作品画像は、専用の高精細ビューアで見たい部分を自由に拡大表示できます。

来館者用端末やインターネットを通じて

広く収蔵作品を公開

非常に簡単な操作で、「Artize MA」に登録されている作品情報を、セキュリティを保ちつつネットワークを経由して公開することができます（インターネット情報発信機能を標準搭載、Web サーバーはオプション）。

日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社

<http://artize.nissha-comms.co.jp/>

京都本社（担当：和田） 604-8551 京都市中京区壬生花井町 3 075(823)5151

東京支社（担当：山口） 141-0032 東京都品川区大崎 2-11-1 大崎ウィズタワー 22F 03(6756)7506

大阪支社（担当：石濱） 541-0047 大阪市中央区淡路町 1-7-3 日土地界筋ビル 06(6232)2714



CONTENTS

ブロック報告

2	〔北海道〕 北の大地の展覧会など 瀬戸厚志
4	〔東北〕 ある郷土作家の顕彰について 諸橋英二
6	〔関東〕 地域の美術を見つめなおす 木村理恵子
8	〔東京〕 文化財を取り巻くデジタル技術の行方 杉浦 智
10	〔北信越〕 富山県美術館開館にあたり感じたこと 八木宏昌
12	〔東海〕 すべてのミュージアムの女／男たちに 原 舞子
14	〔近畿〕 時代は確実に変わりつつある。 山野英嗣
16	〔中国〕 日記から— 美術は楽しい 前田 興
18	〔四国〕 地域資源を魅力に！ 四国アート事情あれこれ 菅 春二
20	〔九州〕 地域力、美術館力 森山秀子

部会報告

22	保存研究部会 根本亮子
23	教育普及研究部会 清家三智
24	情報・資料研究部会 鴨木年泰
25	小規模館研究部会 三谷 渉
26	ホームページ部会 宮武 弘
27	機関誌部会 尾崎信一郎
28	美術館運営制度研究部会 貝塚 健
29	地域美術研究部会 藤崎 綾

賛助会員各社 30

事務局から 31

編集後記 32

投稿要領 33

ZENBI 全国美術館会議機関誌 投稿規定 33

ZENBI 全国美術館会議機関誌 Vol.13 2018年1月31日発行 ©全国美術館会議

〔編集〕 全国美術館会議機関誌部会 幹事 尾崎信一郎 青山杏子

〔発行者〕 全国美術館会議 〒110-0007 東京都台東区上野公園7-7 国立西洋美術館内 TEL 03-3828-0290

〔デザイン〕 宮谷一孝 〔印刷〕 日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社 〒604-8551 京都市中京区壬生花井町 3

ISSN 2186-7259

北の大地の展覧会など

瀬戸厚志 (せと あつし・釧路市立美術館)



本年、北海道で一番話題を呼んだ美術展は、誰に聞いてもおそらく「ゴッホ展 巡りゆく日本の夢」(8月26日～10月15日)と答えるだろう。札幌・北海道立近代美術館の開館40周年を記念して大々的に開催された本展は、道内外からの約20万人の観覧者を魅了した。実に17年ぶりとなった、道内におけるまとまった数のゴッホの展覧会とあって、連日のようにテレビや新聞報道があり、ネットやSNSにも観覧した記事が続々と掲載されるなど、期間中は北海道全体がゴッホ熱に沸いた。時にロビーに収まりきらず玄関の外まで長蛇の列を作った本展には、300km離れた筆者の住む釧路からも多くの人が足を運んだ。展覧会には「客寄せ興業」の一面もあろうが、良い意味で道民に今一度美術館を印象付け、40年を振り返るにふさわしいメモリアルな展覧会となった。

また、広い北海道を感じさせる展覧会となったのが「高倉健展」だ。高倉が出演した映画には「網走番外地」シリーズや「幸福の黄色いハンカチ」、「鉄道員」など、北海道が舞台となった出演作も多く、多くの人々と深い絆を結んだ。当時を知っている人々の中には、まだご本人が生きていると感じる人も少なくないという。そんな熱烈なファンの期待に応えるべく、「高倉健展」は道内5会場を巡回する。釧路を皮切りに、帯広、函館、旭川、札幌と道立美術館5館をくまなく巡回する展覧会は、本展が初だという。第1会場となった釧路と第2会場の帯広の距離は120km。足を運べないこともないが、集客

圏としてはやはり別。5美術館それぞれに集客圏があり、広報の方向性やファン層などを重ね合わせると、道内くまなく巡回するという試みは時流に沿ったものといえる。来年に向けて巡回する先では、待ちわびているファンも多いことだろう。

さて、北海道地域の文化として特記しておきたい展覧会として、アイヌ民族の木彫を取り上げた二つの展覧会をあげておきたい。「現れよ。森羅の生命—木彫家 藤戸竹喜の世界」展(札幌芸術の森美術館、10月14日～12月17日)、「床ヌブリ展」(釧路市立美術館、9月30日～11月12日)だ。二人は同世代のアイヌ民族木彫家として切磋琢磨しながら、それぞれ写実や物語性をテーマに独自の世界を生み出した。阿寒湖畔を舞台に制作を続けてきた2作家の回顧展が、同年に開催されるというのは奇縁というしかない。

アイヌ民族にとって木彫は生活の糧となる生業であり、表現の手段ともなってきた。作品には独特の精神、神々の世界、生活文化が色濃く反映されている。これまで砂澤ビッキが先駆者として注目を集めてきたが、後に続く作家が顕彰されていくことで、アイヌ美術をより多角的、重層的に捉えることができるようになるだろう。「藤戸竹喜の世界」展は国立民族学博物館へも巡回する。これを機会にアイヌ民族の美術・文化に広く深く関心が寄せられることを期待したい。また、網走市立美術館で開催された「安彦良和原画展」(10月7日～11月26日)は、意欲的な企画の一つとして注目を集めた。機動戦士

ガンダム、勇者ライディーンなどのポスター原画やイラストレーションを描いた安彦良和は北海道紋別郡遠軽町出身であり、本展は故郷での里帰り展となった。開館45周年の節目にあえてサブカルチャーとされてきたマンガ、アニメを取り上げた意図は、本展のキャッチコピー「あえて言おう!アートである」と一言に込められている。ジャンルを色分することなく地域の美術を顕彰するという姿勢に、網走市立美術館の信条が感じられる展覧会となった。

さて、日本全体で人口減少が進む中、北海道はさらに急速に少子高齢化と過疎化が進むとされている。北海道は広大な土地面積をカバーするために道立美術館5館を設置、それぞれの地域に美術の拠点を作った。その動きに地方も同調し、市町村立の

美術館が数多く開館。近年はニトリホールディングスが小樽芸術村を開館するなど、美術館王国としての充実度を高めている。しかし、前途は厳しいといわざるを得ない。国と歩みを同じくして地方の財政が緊縮して行く中、美術館の予算も切り詰められ、企画から運営に至るまで、館長以下、学芸員の人脈に頼るほかないといった館も少なくない。大型展は人ともものが集中する札幌とその近郊に限られ、地方はそれぞれ孤立して行くのか、また北海道全体という視点で自治体を超えて連携しながら、人口減少・過疎化の荒波の中で新たな未来を切り拓くのか。いくつもの岐路の中から、最上の選択肢を探し、北海道らしいおおらかな未来を探していきたい。



釧路市立美術館「床ヌブリ展」会場風景

ある郷土作家の顕彰について

諸橋英二（もろはし えいじ・公益財団法人諸橋近代美術館）

日本国内において郷土作家の常設美術館は各地に存在するが、今回の執筆を機に作家の顕彰における困難と努力を知り得た。私の勤務する諸橋近代美術館は福島県の新潟県寄りに位置する会津地方にある。その会津が生んだ画家・斎藤清（1907-97）は今年で生誕 110 年、没後 20 年を迎え県内の 2 つの美術館で記念展覧会が開催された。

一つ目は、やないづ町立斎藤清美術館で開催された「ムンク×斎藤清」展（10月7日～10月29日）。展示は同館所蔵の斎藤版画作品 56 点に国内のエドヴァルド・ムンク所蔵美術館 3 館から出品された版画 9 点に加えられ、5 部構成によるものであった。斎藤は 30 代前半にムンクの代表作《病める子》や《叫び》を模写し単純化と構図の研鑽を重ねている。さらに晩年の「会津の冬」シリーズにおいては、ムンクの内面性に共感した斎藤の新たな展開がうかがえた。

本展は、ムンクという切り口をもって斎藤の生涯作品の変貌に迫る画期的な試みであったが、同館によると美術館にとって今後の存在感を誇示する重要な事業であるという。開館 20 年を迎えた同館は、これまで斎藤作品一筋で展覧会を開催してきた。そこに足を運ぶ来館者も斎藤の素朴な作風に癒しを求めている。しかし、高齢化や過疎化が進む現代において、現状維持では将来像が描けないのが地方美術館の厳しい実情である。その意味においては、開館以来初となる西洋近代作家を取り上げた本展は「新生斎藤清美術館」を象徴づけるも

のになった。今回の展示では他館からの作品借用条件のもと設備の一部改修工事に迫られ予算不足に陥った。そこで同館は独自に地域の企業と個人から寄付を募り何とか設備導入に漕ぎ着けた。また展覧会のオープニングレセプションでは、DJ を呼び、ノルウェー産サーモンを参加者に振る舞うなど、これまでにない斬新な企画が好評を得たという。展覧会以外においては、関東圏の美術大学と連携し、インターン作家による映像作品を館内で展開するなどの事業を行っている。これまでの斎藤清の純朴なイメージを“静”とするならば、人々と美術館を結びつける現在の取り組みは、斎藤の新たなイメージを膨らませる“動”と言えよう。

もう一つの展覧会は福島県立美術館で開催された「斎藤清からのメッセージ」展（10月7日～12月10日）。斎藤は同館が開館する 4 年前に、美術館のコレクションにして欲しいと初期からの作品約 300 点を寄贈した。その後も作家から寄贈を受け続けた同館では現在約 500 点に上る斎藤清コレクションを有している。本展では自館のコレクションと前述の斎藤清美術館からの出品作品と資料約 250 点による 2 部構成の展示であった。画業を通観する第 1 章で注目するのが、斎藤が広告宣伝の仕事に就いていた 20 代から 30 代にかけて手掛けた挿絵と装幀である。挿絵は農家の老人や子供を描いたものが多く、後の版画作品にみられる主題と構図や色彩との関連性もあり興味深かった。第 2 章「会津の冬」シリーズでは、同館が所蔵する同シリーズ

全 130 点が開館初の同時展示となった。広大な展示室が斎藤の雪景色で一面覆われた様は正に圧巻であり、あたかも冬の会津にいるような不思議な感覚であった。

同館によると、展覧会のキーワードはタイトルにある「メッセージ」だという。東京で画家を志していた斎藤は母の実家である会津坂下町を訪れ、晩年は従妹の家に滞在しながら会津の風景の制作に取り組んでいた。そこには日本における高度成長期と地方の変化があった。私の勤務する美術館が位置する磐梯高原も、1950 年に磐梯朝日国立公園に指定され、1980 年代いわゆるバブル期のリゾート法による大規模なスキー場開発などによって現代の観光地を形成した。一方、それらの時流によって地方ならではの豊かな自然や人付き合いが失われた。斎藤の会津の風景画には人々の生活がさりげなく登場する。そこには失われつつある郷土の原風景を今一度取り戻し、郷土愛を後世に伝えたいという想いが込められている。本展は、その斎藤のメッセー

ジをこれまで受け取ってきた我々が、時代の変遷とともに故郷の本質を再考する好機であった。

今回取り上げた二つの展覧会は斎藤清画伯顕彰協議会という組織が其々に共催者となっている。この会には地元のメディア数社、前述の 2 美術館、作家の親族などが加盟している。普段競合するメディア各社が加盟することにより、展覧会の後援・取材広報を包括的に行うことが可能となり、またテレビ番組や新聞の連載特集など多面的な角度から斎藤の功績の普及に継続的に取り組むことができているという。昨今、地方都市においてもトリエンナーレなど新たな美術の潮流などにより、前世代の郷土作家の認知度向上は困難な状況となっている。それ故、美術館の作家の顕彰活動においては、この協議会のような応援団の力が大きな後押しになっているという。「継続と協力」、作家顕彰においてはこの二つのキーワードが重要であることを添えて今回の報告としたい。



やないづ町立斎藤清美術館 「ムンク×斎藤清」展 会場風景



福島県立美術館 「斎藤清からのメッセージ」展 会場風景

地域の美術を見つめなおす

木村理恵子 (きむら りえこ・栃木県立美術館)



北関東の内陸部に位置する宇都宮では、最近、少しずつ朝晩が冷え込むようになってきた。毎年のことながら、秋が深まっていく季節の移り変わりは、とても早い。

関東ブロックの半年間を振り返ると、まず、茨城県近代美術館が工事休館中(2018年1月中旬まで)のため、栃木県立美術館で同館の所蔵品展を開催することになり、「まなざしの洋画史 近代ヨーロッパから現代日本まで」展(4月22日～7月2日)を展覧した。なお、本展は少し内容を変えて、「夢に挑む 洋画をめぐる画家たちの冒険 ～明治・大正・昭和 日本と青森の近代洋画史～」展(9月23日～11月5日)として、青森県立美術館でも開催した。

千葉市美術館の「歿後60年 椿貞雄 師・劉生、そして家族とともに」展(6月7日～7月30日)と、もう一つ、岩手県立美術館などで始まって、その後、神奈川県立近代美術館葉山館に巡回した「没後90年 萬鉄五郎展」(7月1日～9月3日)は、ともに日本近代美術史を再考する好企画であった。前者の椿貞雄は、これまで岸田劉生との関係から紹介されるばかりだったが、劉生没後の活動にも焦点を当て、船橋市に暮らして制作を続けたことを丁寧に跡付けた点で評価される。また後者は、巡回館の担当者たちが数年にわたって会議を重ねて企画した充実の内容で、南画も多数紹介していたところは新鮮であった。筆者は岩手県立美術館と萬鉄五郎記念美術館での展示も見ていたが、葉山館での展示はまた印象の大きく異なるもので、萬

鉄五郎という稀有な画家の捉えどころのなさを痛感させられた。

近隣では、鹿沼市立川上澄生美術館での「川上澄生の北米体験」展(7月8日～10月1日)と足利市立美術館の「生の根源をめぐる四つの個展」(8月5日～10月22日)が記憶に新しい。前者は、専門館として幾度も開催してきている川上澄生の展示であるが、毎回、新しい知見を盛り込みながら工夫を重ねている。とりわけ、今回の「北米体験」は、川上澄生の青年期の経験が生涯の画業に大きな影響を残したことを示そうと、商業美術への関心を含めて紹介していた。足利市立美術館の「四つの個展」は、2016年の巡回展「画家の詩、詩人の絵」を発展させ、篠原道生、山本陽子、岡崎清一郎、春山清の4人を紹介する。ちょうど4部屋に分かれている同館の展示室が、それぞれ個性の際立つ作家たちの小宇宙を形成し、この館ならではの雰囲気醸し出して興味深いものだった。

さらに、とちぎ蔵の街美術館では「生誕145年 竹工芸家・二代飯塚鳳齋」展(9月5日～10月22日)が、栃木県立博物館では人文系の企画として「中世宇都宮氏一頼朝・尊氏・秀吉を支えた名族一」展(9月16日～10月29日)が開催された。前者は、明治後期から昭和初期に活躍した竹工芸家を紹介する企画だが、琅玕齋ほどの知名度がなため、個展は初めてという。戦前期の竹は、万博での積極的な紹介や輸出工芸など、政治的な役割を担った。そういった社会的な意味をも含めた

解明が望まれる分野であろう。後者は、鎌倉時代から戦国時代までの歴史的な事跡と文化を追う大規模な展覧会であった。いずれも地域の美術を紹介するものだが、それぞれに調査が行き届き、好感がもてる。

現代作家の個展として、アーツ前橋の「加藤アキラ 孤高のプリコロール」展(3月19日～5月31日)、埼玉県立近代美術館の「遠藤利克展—聖性の考古学」(7月15日～8月31日)があった。加藤アキラ展は、展示室で行われた田中泯のパフォーマンスと合わせて見た。大勢の観客たちと、インスタレーション、パフォーマンスが渾然一体となった空間は、エネルギー溢れる相乗効果を生み出し、息をのむほどの緊張感に満ちていた。埼玉県立近代美術館の遠藤利克展は、静謐さのなかに圧倒的な存在感を示す彫刻が立ち並ぶ。「26年ぶりに関東で開催される大規模個展」と銘打つと通りの、見事な会場であった。

また、水戸芸術館現代美術ギャラリーの「藤森照信展—自然を生かした建築と路上観察」(3月

11日～5月14日)は、近年多い建築展のなかでも異彩を放つものだった。藤森照信は近代建築史・都市史の研究者として知られるが、建築家としても独創的な作品を発表している。展示室の一隅にはカフェが設けられ、そこで藤森照信の世界を味わいながら、のんびり時間を過ごすことができるようになっていた。それは、この建築家のコンセプトを体現するのにふさわしい空間であった。

栃木県立美術館では夏に、所蔵品による「2D プリンターズ」展(7月15日～9月18日)を開いた。1972年に開館した当初、5年ごとに現代版画展を開催してきた積み重ねがあり、それらの出品作などを新たな文脈に置きなおして紹介する内容である。

関東ブロックのすべての館の活動を紹介することは到底不可能だが、ここに挙げたいいくつかの展覧会だけでも、その充実ぶりは伝わるだろう。しかし、地方の公立美術館は、当館も含めて、予算削減や人手不足に喘ぎながら活動を模索しているように見受けられる。このままでは、いつか疲弊ききってしまおうのではないかと、そんな危惧の念を抱いている。



栃木県立美術館「2D プリンターズ」展における山中信夫作品などの展示風景

文化財を取り巻くデジタル技術の行方

杉浦 智(すぎうら さとし・東京富士美術館)

東京ブロックでは春から秋にかけて多種多様な展覧会が開催され、新たな出逢い方で数々の名作にふれることができた。特にマスコミ主催の大型展覧会が多く開かれた。また、日本美術への高まりも昨年から続いており、見ごたえのある展覧会が続いている。また、近年のマンガやアニメ、ゲーム、絵本や原画展、それもマニア向けのサブカルチャーを扱った展覧会、そしてファッション・デザイン・建築に関する立体的な展覧会が美術館を舞台に開かれる機会が多くなり、美術と他ジャンルとの境界は依然、あいまいなままである。筆者が鑑賞することができた展覧会で、ここ数ヶ月程を振り返ってみたい。

まず、東京国立博物館では、日タイ修好 130 周年記念特別展「タイ〜仏の国の輝き〜」(7月4日〜8月27日)、興福寺中金堂再建記念特別展「運慶」(9月26日〜11月26日)、上野エリアでは、東京都美術館で「ティツィアーノとヴェネツィア派」展(1月21日〜4月2日)、「ボイマンス美術館所蔵 ブリュエール バベルの塔」展(4月18日〜7月2日)、東京駅周辺では、東京ステーションギャラリーでの「没後 40 年 幻の画家 不染鉄展」(7月1日〜8月27日)、「雪村 奇想の誕生」展(3月28日〜5月21日)、三菱一号館美術館では「オルセーのナビ派」展(2月4日〜5月21日)、三井記念美術館では「地獄絵ワンダーランド」展(7月15日〜9月3日)、「驚異の超絶技巧!—明治工芸から現代アートへ—」展(9月16日〜12月3日)。六本木では

サントリー美術館の「天下を治めた絵師 狩野元信」展(9月16日〜11月5日)などが話題を呼んだ。永青文庫の「長谷川等伯障壁画展 南禅寺天授庵と細川幽斎」(9月30日〜11月26日)も忘れられないものだった。東京の展覧会は枚挙に暇がない。

さて、これらの展覧会には作品を取り巻くデジタル技術の存在がある。作品と人を介す装置についてもデジタル化への変化が激しい。このデジタル化は AI (人工知能) を含め、現在様々な試みが行われているようだ。特にスマートフォンをはじめ、デジタル機器の活用は、来館者に新しい刺激を残しつつ、その利便性とデメリットの狭間で未だ落ち着きをみせていないように思う。国立西洋美術館で開催された「アルチンボルド」展(6月20日〜9月24日)では、会場入口に顔認証で自分だけのアルチンボルドが出来上がるフォトスポットに人気が集まり、サントリー美術館での「おもしろびじゅつワンダーランド」展(8月1日〜8月31日)では、デジタル技術を駆使し、日本人にとっても馴染みが薄くなりつつある日本の伝統文化を、子どもや外国人にもわかりやすい教育普及性を重視した展覧会になっていた。国立新美術館で開催された「草間彌生 わが永遠の魂」展(2月22日〜5月22日)は 88 歳の現代人気作家の全体像を伝える展覧会であった。赤、青、黄などの水玉やアメーバ型の形がカラフルな絵画は、「世界の KUSAMA」の圧倒的な存在感を感じた。中でもスマートフォンで撮影できるコーナーにより、SNS 上も実際の会場も大賑

わいとなり、一大「やよいちゃん」ブームを巻き起こした。平日にもかかわらず人々が押しよせ会場は異様な熱気に包まれた。10月1日新宿区にオープンした草間彌生美術館にも行きたいと思ったが、入館は事前予約制で年内のチケットは即日完売したらしい。残念。同じく国立新美術館での「安藤忠雄展—挑戦」(9月27日〜12月18日)は、稀代の建築家の、約半世紀にわたる活動、模型、設計図、ドローイング、映像などが一挙公開。安藤忠雄の全力投球の軌跡を見ることが出来た。野外展示場に実物大に再現した《光の教会》は、実際の建築空間を体験できる驚きの展示であった。壁のスリットからの十字の光が味わえ、キリスト教徒でない私も思わず巡礼者のように手を合わせそうになり、こちらも絶景のフォトスポットと化していた。その他、多くの展覧会では出入口のコーナーにフォトスポットがあり、まさしく、インスタ映えの空間が。今やフォトスポットは展覧会にはマストスペースとなりつつある。かつて観光地にあった顔出しパネルが、美術館という場で再燃している。

最後に東京藝術大学大学美術館にて開催された「素心伝心」展(9月23日〜10月26日)を紹介

したい。それはバーミヤンからシルクロードを経て、その終着地である奈良に至るまでの壁画や美術の変遷を紹介した企画展で、法隆寺の国宝釈迦三尊像を 3D 計測や 3D プリンターの技術を用いて金銅仏として再現。いわゆる「クローン文化財」の展覧会である。門外不出の国宝や焼失してしまった壁画などを、開発した高精度な特許技術を駆使し、原寸大に文化財を再現。特に劣化が激しい文化財、または、永遠に失われてしまった文化財の本来の姿を甦らせ、未来に伝えていくための試みである。最も印象深かったのはバーミヤン東大仏の天井壁画だ。アフガニスタンの古代遺跡にあった高さ約 38 メートルの東大仏は、2001 年にタリバンが爆破した。大仏が納まっていた石窟上部の壁画も一緒に失われたが、同大学院研究チームが写真や計測データをもとに、忠実に蘇らせた。複製した仏像や仏教壁画を並べるこの企画展は、仏教の道でもあるシルクロードで花開いた多様な文化を伝えている。この人類の営みや平和に思いを巡らすクローン文化財の展覧会のように、美術館・大学・企業の三つの研究機関が力をあわせた三位一体の展覧会が全国に広がることを期待したい。



国立新美術館「安藤忠雄展—挑戦」《光の教会》



東京藝術大学大学美術館 シルクロード特別企画展「素心伝心」クローン文化財 失われた刻の再生 フォトスポット

富山県美術館開館にあたり感じたこと

八木宏昌 (やぎ ひろまさ・富山県美術館)



私の勤務していた富山県立近代美術館は、移転新築し富山県美術館として今年開館した。ユニークな美術館として関心を持たれている当館の開館にあたり、その状況と感じたことをレポートすることとしたい。

まず当館は、3月25日に一部開館を行った。これまでの美術館は、建築工事が完成した後に枯らし期間(ふた夏以上といわれる)をおいて開館を迎えるのが常識とされているが、当館では建物が完成した段階で使用できるところから利用していた。もちろん、枯らし期間の間は作品展示は行わず、展示室は環境整備に専念し、アトリエ、ギャラリー、レストラン、カフェなど、一部の機能や建築自体を見ていただくことでスタートした。なるべく早く建物に馴染んでもらおうという思いからだったが、予想をはるかに上回る来館者に、館員は全面開館準備と併行してその対応に追われた。4月29日には遊具を配備した屋上庭園がオープンし、親子連れや美しい立山の眺望をもとめるカメラマンなど、ここでも多くの来館者を迎え、8月26日の全面開館前に577,392人が来館した。

屋上庭園で遊んで汗をかき、3階のアトリエでアート体験や創作に親しみ、所蔵ポスターからの3,000点を画像により楽しめるタッチパネルや、体を動かすことで光の作品が生まれるインタラクティブ・アートで遊んだり、アートを体感できる無料のスペースや、見晴らしの良いレストランの存在が多数の来館につながったと考えられる。

そして、2階の展示スペースは館の心臓部ともいえる空間であり、ここでは全面開館以来、博物館活動の目的に適った条件を守りながら展覧会を開催している。開館記念展 Part1「生命と美の物語 LIFE 一楽園をもとめて」(8月26日～11月5日)は、国内40の美術館から名品の数々をお借りし、海外の3館と当館所蔵作品を加えた177点を8つの章により紹介する大規模展となった。

屋外彫刻についても、何かシンボリックな彫刻を置くことを考えた。これも抽象彫刻から現代的な表現のものまで、さまざまな作家の作品を検討した。彫刻として美術館にふさわしいだけでなく、マスコットのような親しみやすい存在として三沢厚彦の熊の彫刻を選んだが、ねらい通りその空間は、今や人気のフォト・スポットとなっている。

屋外彫刻、屋上からの眺望、そして地上の公園ではありえない雄大な立山をバックに子どもが膜状トランポリン「ふわふわ」の上で跳ねる姿など、インスタ映えするようなロケーションも当館の人気の一つとなっているといえよう。

開館記念展の観覧者数は、57,675人、会期中のコレクション展は64,829人、そして来館者数は一部開館から88万人を超えた。数値からみるとリニューアル後はすべての値が前館より増加しているが、企画展とコレクション展の人数の格差があまりなく、展覧会鑑賞以外の来館者が多いという内容である。

これでは、当館は本来の美術館でないという非

難の声も上がるかもしれない。たしかに、美の殿堂というよりむしろ富山の新観光スポットとなっている観は否めない。しかし、美術館でありながら大衆に求められるスペースとして活動することが、前館での経験を踏まえた当館の新しい試みであり、開館間もない当館が美術館のあり方を変えた「ありえない美術館」として注目されてきている点である。

今、美術館を訪れている子どもたちにとって、どんな作品を観たか造ったかということよりも、美術館に行ったら楽しかったという記憶だけが残るかも知れない。それは従来の美術教育の目的から外れるものかもしれないが、「美術館」という言葉

が生活に溶け込んだものになってくれれば、その子は将来も美術館に来てくれるだろう。

本来ならば、ブロックをリサーチし各地の美術状況をレポートすべきところであるが、時間の都合などにより自館の状況報告にとどまざるを得なかったことをお詫び申し上げる。いま、全国的に多くの美術館が改修の時期に入っている。北陸ブロックでも、長野県信濃美術館が建替、新潟県立近代美術館が改修時期に差し掛かっている。来るべきリニューアル、ニューオープン・ラッシュに向けて当館のケースが何かの参考になれば幸いである。



富山県美術館外観

すべてのミュージアムの女／男たちに

原 舞子 (はら まいこ・三重県立美術館)

今年度上半期の東海ブロックでは、独自企画の展覧会が目立った。いくつか挙げると、名古屋市美術館の「異郷のモダニズム—満洲写真全史—」展(4月29日～6月25日)、豊田市美術館「奈良美智 for better or worse」展(7月15日～9月24日)、岐阜県美術館「BY 80s FOR 20s」展(9月8日～10月29日)などである。学芸員の長年の研究蓄積による専門性の高い展覧会、美術館とゆかりの深い作家の満を持しての大規模個展、美術館が開館した80年代の美術を振り返りつつこの先を見据えた周年記念展、と各館の個性豊かな顔が見られるものであった。館の規模の大小に関わらず、ユニークな活動を続ける美術館が東海ブロックには実に多いと感じる。

たとえば、郷土の美術のほかに、挿絵、絵本原画、グラフィックデザインに関する展覧会の開催とコレクション収集を行っている刈谷市美術館では、「描かれた大正モダン・キッズ 婦人之友社『子供之友』原画展」(4月22日～6月4日)に続いて、「斎藤吾朗の描けば描くほど」展(7月22日～9月3日)で地元・三河の作家の個展を開催。さらに「篠原有司男展」(9月16日～11月5日)では初日に作家によるボクシング・ペインティングの公開制作も実現。多彩なテーマで勝負し、毎回美術ファンを惹きつけていた。

日本で唯一の瓦をテーマにした美術館と謳う高浜市やきものの里かわら美術館。地元特産の三州瓦にちなみ、国内外の瓦、やきものとそれに関連

する絵画、版画、写真等の美術を収集する同館は、コレクションにちなんだ展示以外にもアール・ブリュット、サブカルチャーの紹介を数多く行っている。今夏は「みえるような、みえないような」展(7月8日～9月18日)を開催。東海圏を中心に活躍する若手作家の絵画、彫刻からアール・ブリュット、名古屋大学レゴ部の作品、やきもの、館蔵の考古資料まで、鑑賞者の想像力をかき立てる作品が展示室に並んだ。あえて曖昧な展覧会タイトルをつけ、多種多様なジャンルの作品を盛り込むことで、見る側の自由度を高めて楽しめるよう配慮された内容であった。

一宮市三岸節子美術館では、特別展「丸木スマ展」(7月1日～8月13日)が開かれた。洋画家・三岸節子の生家跡地に建てられた同館は、これまでも桂ゆき、丸木俊、芥川紗織らの個展や女性作家の紹介を行ってきた実績がある。「丸木スマ展」もこれらの女性作家シリーズに連なるものと思われるが、今後とも館の特色を生かした活動の継続に期待したい。

このほか、碧南市藤井達吉現代美術館での「リアル(写真)のゆくえ」展(8月8日～9月18日)と豊橋市美術博物館での「ニッポンの写実」展(9月30日～11月12日)はともに写実をテーマとした展覧会であった。奇しくも100年前の1917年は、岸田劉生らの草土社が名古屋で展覧会を開催し、それに触発された大澤鉦一郎、宮脇晴とといったこの地域の若い画家たちが愛美社を結成し

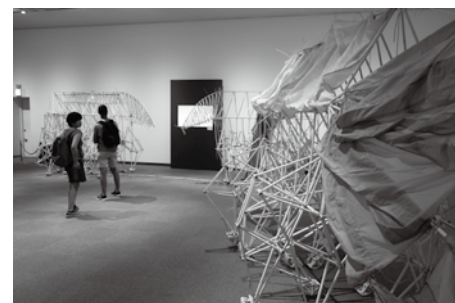
て写実表現に邁進していく年である。両展覧会がそれにちなんだものかどうかはわからないが、時代を経てもなお写実表現が世の関心を集めていることは確かであろう。

さて、今年は三重県立美術館と岐阜県美術館が開館35周年を、愛知県美術館が25周年を迎え、静岡県立美術館も31年目に入った。東海ブロックでも開館から20年、30年と活動を重ねてきた館が増え、施設の老朽化に伴う大規模改修工事のため長期休館に入る館も少なくない。人材面では各館の世代交代が進み、学芸メンバーの入れ替わりも多く、館長の顔ぶれもこの数年でだいぶ変化した。また、長年地元で愛されてきた証でもあるのだが、多くの館で来館者層も高齢化していると聞く。そこで幅広い世代に来館をうたえるための手段として、SNSを利用した情報発信が美術館でも定着しつつある。そんな中での話題

を最後にひとつ。岐阜県美術館の監視係が美術館での仕事や日常を描いた4コマ漫画『ミュージアムの女』(KADOKAWA)が今秋一般書籍化された。昨春秋に館の公式SNSで公開されて以降、インターネット上で注目を集め、地元テレビや新聞でも取り上げられてきた。人気を博しているのは、美術館での仕事や出来事をわかりやすく描いていること以上に、自身が勤める美術館への愛があふれた温かな視線が感じられることが理由だろう。日頃、展示室という前線に立ち、鑑賞者と作品を見守ってくれている監視係だからこそ描ける内容である。美術館の個性を彩っているのは、コレクションや展覧会であることは勿論だが、それ以上に美術館を支えるすべての人々の存在がユニークであり、美術館を一層輝かせてくれるのだと感じ、あらためて頭が下がる思いである。



岐阜県美術館「開館35周年記念 ナンヤローネ No.3 BY 80s FOR 20s 1980年代発 2020年代行き」展 会場風景



三重県立美術館「開館35周年記念 テオ・ヤンセン展」会場風景

時代は確実に変わりつつある。

山野英嗣（やまの ひでつぐ・和歌山県立近代美術館）

私事ながら、かつて15年勤務した兵庫県立近代美術館は、「近代」を名称からはずして15年になる。今夏、生まれ変わった富山県美術館も、前身の「近代」の文字はなくなった。現在私が在職する和歌山県立近代美術館では、リニューアル休館中の滋賀県立近代美術館所蔵の代表作を預かって、常設展示で、同館所蔵の代表作であるアメリカ戦後美術の大作や日本画を公開している。

兵庫や和歌山の近代美術館が開館した1970年代以降、富山や滋賀をはじめ、全国の自治体に建設された多くの館が、今、施設の老朽化とともに休館し、再出発を目指している。戦前に建設された京都市美術館も、3年後の開館に向けて増改築の真ただ中だ。

こうした老舗の館の休館も相次ぐ中、時代が確実に変わりつつあることは、展覧会でも実感する。その最たる例が、京都国立近代美術館で開催された「絹谷幸二 色彩とイメージの旅」展（8月22日～10月15日）だろう。同館に勤務し、洋画の担当でもあった筆者も驚きの展覧会で、安井賞作家とはいえ、絹谷氏の展覧会が同館で開かれることは、以前なら考えられなかった。

そして、大阪の国立国際美術館では、連続して新聞社と共催の大型企画展の開催が続いた。「ボイマンス美術館所蔵 ブリュウゲル パベルの塔」展（7月18日～10月15日）のような時代を超えた展覧会は、関西では国際美術館が会場という図式が定着した感があり、20万人を超える来館者を集

めた。「クラナハ展」（1月28日～4月16日）も、国立西洋美術館からの巡回で、近畿圏での本格的な古典絵画紹介の場となった。あらためて思うに、大阪に国立美術館があること自体意義深く、前身の1970年・大阪万博美術館の成果が、今日に継承され生かされていることを、今一度検証してみる必要があるだろう。

この万博開催の年に、奇しくも相次いで生まれた兵庫、そして和歌山のふたつの近代美術館開館の意味を再考することは、「関西ブロック」の美術事情をふりかえる上でも貴重である。幸いにも両館に関わった筆者は、そのことを学芸生活最後の研究課題としたと思っている。

さらに、「ミュージアム」という施設が、わが国では、美術館そして博物館と分かれてしまっていることも気にかかる。開館120年を迎えた京都国立博物館は、「国宝」展（10月3日～11月26日）をはじめ、いわゆる「美術」部門の展覧会開催にも積極的だ。遙か昔には、同館でも「ドレスデン国立美術館展」（1974年）のようなヨーロッパ古典美術も紹介され、まだ学生だった私も、はじめてのデートの場となった懐かしさもあるが、近年の京都国立博物館は、とにかく多数の来館者を集める「美術展」の開催が目白押しで、和歌山から見れば羨ましい限りである。

また、筆者は最近、マンガやアニメについての展覧会企画を、戦前の前衛美術とのかかわりから模索しつつあり、同時代のわが国の動向に大きな影響

を与え、その原点ともいうべきウォルト・ディズニーの展覧会「ディズニー・アート展」（10月14日～2018年1月21日）が大阪市立美術館で開かれたのも貴重だった。戦前には、水木しげるも中之島洋画研究所に学んでいたというから、あらためて漫画史を視野におさめてみたい。それというのも、京都に国際マンガミュージアムがありながら、こうした戦前の美術界とマンガとの関わりは紹介されていないからでもある。

閑話休題。筆者が近代美術館についてこだわるのは、近年、伊藤若冲をはじめ、大英博物館との共同プロジェクトとして実現された、あべのハルカス美術館の「北斎」展（10月6日～11月19日）など、近代以前の日本美術についての展覧会が大きな関心を集め、「時代が確実に変わりつつある」事例ともなっている。それは、和歌山県立近代美術館の「ア

メリカへ渡った二人 国吉康雄と石垣栄太郎」展（10月7日～12月24日）をはじめ、神戸市立小磯記念美術館で11月からの巡回開催となる「生誕150周年記念 藤島武二展」など、近代絵画を正面から捉える展覧会が減少し、いわゆる「近代美術史」を再考する展覧会すら企画しづらいような気運とも結びつく。

そしてこのことが、拙稿の冒頭でも触れた「近代」の問題と連動しているからだ。たとえ大量動員が期待できなくとも、かつて近代作家の個展や名作展（死語になったようにも思うが）が頻繁に開催されていたように、あえてこうした展覧会も、さらに新たな切り口で開かれることを期待したい。和歌山県立近代美術館の先の二人展では、アメリカに残され、『ライフ』誌でも掲載された石垣栄太郎作品の新発見という成果もあった。



石垣栄太郎《ハーレム裁判所のための壁画》1938年頃（新発見作品）（個人像）



京都国立近代美術館「絹谷幸二 色彩とイメージの旅」展 会場風景
撮影：加藤成文

日記から— 美術は楽しい

前田 興(まえだ こう・倉敷市立美術館)

2017年の全国美術館会議総会は5月25日、26日の両日、神奈川県鎌倉市で開催されたが、それから1週間も経たない岡山市内の小さな画廊での出来事。開催中の銅版画家・若月公平の展覧会に心躍らせながら出かけていった。その細密な技法と表現をひそかに気に入っていた。倉敷市立美術館で7月15日から9月10日にかけて開催した岡山出身の銅版画家・永岡博の生誕80年記念展に向けての勉強の意味合いもちょっとだけあった。若月は、東京で活躍している作家であり、岡山にゆかりはないと思っていたので、地元で美術関係者に会うこともなかりうと、油断していた。画廊に入るなり、目の前にはなんと神奈川県立近代美術館の水沢勉館長がコーヒーマシンを片手にゆったりと座っておられるではないか。“貴方は、つい3、4日前、美術館会議総会の席上で、ホスト美術館の館長として全国の猛者どもを相手にタクトを振っていたのでは 아닙니까！何で今日、ここにいますの？”(失礼!) 狼狽する私。微笑む水沢館長。頭が真っ白になり早々に退散。若月公平の展覧会は、後日、じっくりと拝見にうかがった次第。フットワークのよい水沢館長から元気をいただきました。

今年の夏は、島根県立美術館の「小茂田青樹」展(7月14日～8月28日)へ。友人の日本画家曰く、「この時代の日本画家は絵具と筆の使い方がうまい!」。チラシにも「透明感のある繊細な色彩と描線が丁寧に重ねられた珠玉の風景画」とある。一般に戦後の日本画がどんどん厚塗りになっていく中

で、大正期の「薄塗りで高い明度を保った筆触」(田野葉月学芸員)は魅力的。前記、日本画家の言葉。「昔に比べ今の日本画は、油彩画との画材の違いはあるけれど、なんだか普通の絵になっちゃったなあ。大正期の日本画を見ていると、現代の日本画家が忘れていた部分があるような気がする」。昔はよかった風で、何だかおじさん臭いけど、一理あるような。ともあれ彼は、徳島県立近代美術館で開催された「廣島晃甫回顧展」(10月21日～12月10日)でワークショップを行った。

同じく大正期の日本画を扱った笠岡市立竹喬美術館の「デカダンスの気配」展(9月22日～11月5日)を見る。この時代はアクの強さや官能的な表現、一方で柔らかな線描や繊細な表現など、多様な価値観が花開いた時期。培広庵コレクションの奥深さに感じ入る。我が倉敷市立美術館で開催した「大正期の遙邨」展(8月22日～10月15日)とも共通するちょっと暗いところもある。島根も笠岡も考えさせられることが多い、実りある展覧会でした。

昨年から随時行っている『神像彫刻重要資料集』執筆に伴う岡山県内の神像調査も大詰めを迎えている。県内の大学の先生方と美術館・博物館の学芸員がチームを組んでの作業だったが、鏡野町の布施神社や金剛頂寺、瀬戸内市の豊原北島神社など数々の興味深い神像に接することができた。高梁市の御前神社の神像(鎌倉時代)は調査後に岡山県指定重要文化財になった。調査をすすめる中で、たまたま目にする機会を得た倉敷市・

正蓮寺の薬師如来坐像(平安時代後期)は、今度、倉敷市指定重要文化財になる。締め切りはとっくに過ぎている。割り振られた神像の原稿をそろそろ提出しないと編集者の堪忍袋の緒が切れそうで少々怖い。

今年度に入って倉敷市立美術館は小さな試みを二つしている。一つは、コレクションの核となっている池田遙邨の写真撮影を条件付きでOKとしたこと(「池田遙邨名作選」3月18日～6月18日)。このことによって来館者は展覧会の感想を自分のブログやフェイスブックに掲載し易くなった。この試みは先の銅版画家・永岡博の生誕80年記念展でも実施。井原市立田中美術館の「安藤榮作展」(9月15日～11月5日)でも写真撮影はOKだった。勿論すべての展示に適用することは不可能だが、情報の拡散ということを考えればできることはやった方が美術館の活性化に繋がると思う。

もう一つは、9月23日から11月26日の会期で開催した「山本二三展」で、お隣の大原美術館と入館料の相互割引を行ったこと。大原美術館では「津久井利彰」展(9月30日～12月27日)と「水野里奈」展(9月12日～11月19日)。割引対象外ではあったが有隣荘で「宮永愛子」展(10月6日～10月22日)。このたびの相互割引は小さな一歩だったが、お互いにとってプラスになるなら、美術館の規模や公私の違いを越えて協力できる仕組みが作れたらと思う。その意味で今後に繋がる一歩になればと思っている。

9月後半、「雪舟筆《傲夏瑤山水図》84年ぶり発見」とのビッグニュースが流れた。山口県立美術館では「奈良西大寺展」(10月20日～12月10日)に併せて、10月31日から12月10日まで「雪舟発見!展」と題してお披露目するという。今からワクワク、本当に美術は楽しい。



島根県立美術館「小茂田青樹」展 会場風景 写真提供：島根県立美術館

地域資源を魅力に！ 四国アート事情あれこれ

菅 春二 (かん しゅんじ・新居浜市美術館)



陽光と島影を満面に湛え、黄金色に輝く情緒あふれる瀬戸の海。打ち寄せる波、青い空、白い雲、遙か彼方へ続く水平線、それらが織りなす雄大な太平洋の海。四季折々の花、草木で美しく彩られた四国山地。そこに暮らす人々の息吹。そして、海・山・人が出会い、文化、アートが生まれる。近頃、改めて、四国のアートには魅力が満ち溢れていると感じている。そのすべてを網羅することはできないが、独断と偏見で、2017 年上半期のアート情報をご紹介します。

まずは、展覧会から。高知県立美術館「絵金特集：もうひとつの絵金—芝居絵屏風をめぐる土佐の文化」展 (3 月 30 日～6 月 11 日)。コンパクトな空間の中に、幻想的とさえも思える見事な展示、演出で、極彩色、迫力あふれる絵金の魅力を表現、江戸時代にタイムスリップしたかのようなだった。加えて、南国市札場地区の芝居絵屏風修復過程を紹介。文化財を未来へ伝える貴重な取り組みにも触れる企画であった。次に、高松市美術館「絵本のひきだし 林明子原画展」(4 月 15 日～5 月 28 日)。ややもすると単調ともなる原画展。バランスよく配置、構成され、フォトスポットやカラフルな棚・引き出しの効果も相まって、知らぬ間に絵本の世界へと誘われ、絵本の主人公と幼少期の自分がオーバーラップ、忘れかけていたものを取り戻し、会場を後にした。

ところで、昨今の美術館を取り巻く情勢は相変わらず厳しく、地方にあってはなお一層厳しい。そのような中で開催される展覧会からは、学芸諸氏の腐

心の様子が伝わってくる。愛媛県美術館は、「ウェルズ国立美術館所蔵 ターナーからモネへ」展 (6 月 7 日～7 月 23 日) ほか、実行委員会方式で入場者の増加、事業費確保という努力が続く。今治市玉川近代美術館や町立久万美術館も、コレクション展を中心に企画展を織り交ぜながらの運営努力。徳島県立近代美術館、香川県立ミュージアム、香川県立東山魁夷せとうち美術館では、企画展もさることながら、私はいつもコレクション展を注視している。諸館のコレクション展は、いつ見ても学芸諸氏の地道な活動とその成果、工夫の様子が見て取れ、本当に頭が下がる。

続いて、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館の「志賀理江子 ブラインドデート」展 (6 月 10 日～9 月 3 日)。写真、スライドプロジェクターのインスタレーション、言葉。会場の中に広がる何とも不思議な世界。気鋭作家の発するメッセージを咀嚼しようと、座り、立ち、近付き、離れ、何度も何度も会場内で作品と向き合った。それと同時に、開館以来大切にしてきたであろう猪熊弦一郎の思い。それを忠実に実行しようと「現代美術」に向き合う学芸の姿を想起した。美術館の評価は様々なところにあると考えるが、開館以来のコンセプトを大切に作る姿。「美術館とは何か」ということを改めて自問自答した展覧会であった。

さて、ここからは、展示も包括したアートプロジェクトの話題をお届けしよう。「HOT サンドルプロジェクト」(8 月 7 日～8 月 29 日)。丸亀市沖合の、塩

飽諸島 (本島・広島・小手島・手島) を舞台に展開されたレジデンス型アートプロジェクト。「島で暮らして、島で描いた。」「未来のアーティストを育むアトリエ」と題し、日本画専攻の学生が島に滞在、制作、出来上がった作品は展示、公開される。島民と交流するワークショップもある。過疎化が進む離島。夏の一時期が賑わいと笑顔にあふれる。残念ながら、現地には伺えなかったが、作品を拝見しながら、未来のアーティストと島の人々の顔が浮かんでくるようで、心の奥底に、温かいものを感じた。高松市塩江美術館「かがわ・山なみ芸術祭連携企画—ひと共—/AGAIN 井本英樹ひびびびび展」(4 月 18 日～5 月 28 日)。山間地域の人々の生活に溶け込み共存し、そこから何らかのアクションを起こす。今治市伊東豊雄建築ミュージアム「新しいライフスタイルを大三島から考える」展 (7 月 1 日～2018 年 6 月 15 日)。伊東豊雄独自の方法で島づくりに取り組み、経済に勝る豊かさのビジョンを描く。最後に

当館の「地域に根差した本当の色からはじまる美術と音楽」。女子美術大学 (指導教官：橋本弘安副学長) と当館が共創で地方創生に取り組む事業である。雨中の川面に光り輝く石。紫、緑、白、黒…。様々な石を見つけ歓声とともに、若きアーティストたちが石を拾う。恐らく美術館での設備例はないであろう粉碎機で石を砕き、色の粒子をつくる。自然が作り出した「本当の色」という素材を収集すること、そして、地域の歴史、風土をバックボーンに制作する意義。若きアーティストたちには、そこから、様々なものを掴み、感性を磨き、新たなアートを生み出し、大きくはばたいて欲しい。

四国の風土に根差し地域の資源を活かすアートプロジェクト。地域資源は、地域の人々、美術館と結び付き一層光り輝く。2017 年上半期の四国ブロックの出来事が、将来日本のアートシーンの 1 ページを飾るかもしれない。



「HOT サンドルプロジェクト」小冊子 提供 丸亀市文化観光課

地域力、美術館力

森山秀子（もりやま ひでこ・久留米市美術館）

私が勤務する美術館は、2016年10月、石橋美術館から久留米市美術館へと名称を変えた。運営が公益財団法人石橋財団から久留米市へと変わったためである。

石橋美術館と久留米市美術館の大きな違いはコレクションの有無である。コレクションがおのずと館の特徴づけにもつながるわけであるが、コレクションがまだほとんどない久留米市美術館では、活動をととして独自性を築き上げていくべく模索中である。私事と過去の振り返りばかりで恐縮であるが、石橋美術館はコレクション展示を核とする活動を推進してきた。私も当然他館のコレクションにも強い関心を寄せ、機会があればコレクション展示を積極的に拝見してきたし、今もその姿勢は変わらない。開館から数十年を経過し、特徴あるコレクションを形成してこられた先輩公立館に敬意を払うとともに、久留米市美術館も今後少しずつ収集を進めていきたいと思っている。

そういう理由から、九州ブロックの上半期を振り返るにあたり、まずはコレクション展示に注目してみたい。改修の時期が重なったことにより実現した北九州市立美術館と福岡市美術館のコレクションによる「夢の美術館—めぐりあう名画たち—」展は、2016年12月の沖縄を皮切りに、長崎、熊本、久留米、宮崎、松江を巡回した。両館のコレクションのすばらしさを一般に再認識させるとともに、美術館関係者がコレクション、及びその活用について再考する機会ともなった。熊

本県立美術館の「大熊本県立美術館展 リターンズ」（7月15日～9月3日）は、2016年4月14日と16日に発生した地震によって開会後約1週間で中止を余儀なくされた「開館40周年記念 大熊本県立美術館展」をふたたび実現したもの。前回の構成を引き継ぎつつ、震災時の館の取り組みなども紹介され、作品のもつ力に加え館の積極的な活動そのものが熊本の元気の表れとして印象づけた感がある。

コレクションを核とし、さらにコレクション作家の調査研究にもとづく展覧会にも注目したい。福岡県立美術館では「生誕120年 中村琢二」展が開催された（3月25日～6月18日）。同館と宗像市が所蔵する琢二作品と関連作家、さらに琢二の世界から広がる画家たちをとりあげたもの。佐賀県立美術館で開催された「肥前さが幕末維新博覧会プレ企画展 山口亮一と佐賀美術協会の100年」（7月28日～9月3日）は、佐賀美術協会の初代会長としてその地の美術振興に尽力した山口亮一と同協会で活躍した美術家たちを紹介するもので、背景幕を使った佐賀美術協会展草創期の再現展示が印象的であった。鹿児島市立美術館の「生誕150年記念 藤島武二展」（9月29日～11月5日）は、画家の出身地での半世紀ぶりの回顧展であり、出身地にある美術館ならではの視点が展覧会企画に生かされていた。藤島の修業時代の紹介はその一例であり、同館所蔵のデッサン類も多数出品されていた。

財団法人と市という運営母体の違いがもたらすもう一つの違いは、地域に対する意識の違いと言えるかもしれない。久留米市美術館に変わって、私もまた地域における美術館の存在意義について以前より深く考えるようになった。熊本市現代美術館の「開館15周年記念 誉のくまもと展」（9月16日～11月26日）は、「水俣」という負の歴史をもち、熊本地震を体験した館だからこそ実現できた企画である。熊本という地域への目配りは当然であるが、「広島」「3.11」へも意識を拡げ、災害や人間の生そのものと真剣に向き合う姿勢が感じられる。と同時に、自館のコレクションを生かし、熊本市民がテーマや出品作品に親近感を感じるような内容のものにしたい、という企画者の意図も伝わってくる。地域性を考慮しつつ、単に一地域にとどまらない普遍性をもつ活動は、今後の美術館活動の一指針となろう。

最後に、たびたび私事にもどって恐縮であるが、

久留米市美術館で開催した「川端康成 美と文学の森」展（4月1日～5月21日）での反省点と学んだ点をあげ、この報告のまとめとしたい。反省点は、川端康成を久留米市民に身近に感じてもらうという視点が欠けていたこと。幸いにも川端は久留米出身の画家古賀春江や高田力蔵の友人でもあり、その縁で久留米を訪れたこともあったので、急遽理由をこじつけることはできたものの、たとえ直接のつながりはなくとも市民に親近感をもってもらいたいという視点が必要だったことを痛感した。一方で川端文学に親しんだことのある来館者にとっては、展覧会が読書欲を思い出させるきっかけにもなったようだ。川端文学を読み直して再度来館下さった方もおられたという。展覧会が来館者の知的好奇心を刺激する役割も果たすこと、美術館の存在意義はこういう点にもあることを再認識し勇気づけられた。コレクション及び美術館は地域の宝であると私は信じている。



佐賀県立美術館「山口亮一と佐賀美術協会の100年」展 会場風景
背景幕の上に段がけの手法は、佐賀美術協会草創期の展示を再現したもの



熊本市現代美術館「誉のくまもと展」会場風景
同館所蔵の安本亀八「相撲生人形」と瀧下和之によるコミッションワーク

保存研究部会では毎年2回の会合を実施しているが、今年度は11月と2月に開催予定のため、今年度の会合報告は次回とさせていただきます。ここでは当部会が担当した2017年3月の学芸員研修会のことを中心に報告しておきたい。

3月13日に国立西洋美術館で開催した学芸員研修会は、「作品借用時のコンディション・チェックについて」をテーマに、3名の特別講師による講演と当部会の相澤邦彦氏（兵庫県立美術館）による発表でプログラムを構成した。

講師をお願いしたのは、いずれもコンサヴァターとして第一線で活躍中の方々である。大原秀之氏（吉備国際大学教授）には「海外より借用する際のコンディション・チェックについて」、ロジャー・グリフィス氏（ニューヨーク近代美術館（MoMA）コンサヴァター）には「海外の事例紹介：ニューヨーク近代美術館（MoMA）における借用時のコンディション・チェックと、同館における事例について」、神庭信幸氏（東京国立博物館特別研究員）には「掛け軸、屏風、茶器等の借用とコンディション・チェックについて」とそれぞれ題した内容で、実体験エピソードも交えた貴重なお話をいただいた。また、相澤氏には部会代表として、国内巡回展を想定したコンディション・レポートの雛形（試行版）と症例・用語集を発表いただいた。このレポート作成は2009年から継続して研究討議を重ねてきたもので、このたびようやくその成果をお披露目できて大変嬉しく思っている。

研究会当日は、我々の予想をはるかに超える300名近い参加があった。改めて参加者の皆様に御礼申し上げるとともに、一部の方に会場外で聴講いただくご不便をおかけしたこと、質疑応答の時間がほとんど取れなかったことをお詫びしたい。また、会場をご提供いただいた国立西洋美術館の皆様と、準備段階から心強いサポートをいただいた事務局にも

感謝申し上げる。コンディション・レポート試行版と症例集は、その後多少の修正を加え、4月から全国美術館会議ホームページ（以下、全美HP）の会員館ページに掲載している。多くの方にご活用いただき、忌憚ないご意見・ご質問をお寄せいただければ幸いである。また、研修会報告書はなるべく早くお届けできるよう、鋭意編集集中である。なお、今回研修会の実質的な準備を担当したのは、相澤氏のほか、田中善明氏（三重県立美術館）、花井素子氏（岐阜県現代陶芸美術館）、安藤里恵氏（碧南市藤井達吉現代美術館）、邊牟木尚美氏（国立西洋美術館）の5名による対策チームであったこと、当日の会場運営にその他多くの部会員が携わったことも、最後に付け加えておく。

さて、大きな課題が一区切りしたことに伴い、今後しばらく長期的に取り組むテーマは設定せず、会合ごとに関心のあるテーマを設けて事例発表や意見交換などを行っていきたいと考えている。今年度第1回会合は「輸送箱の仕様」「特別展の仮設ケース内に使用する材質」をテーマに、11月16日と17日に国立西洋美術館で開催した。第2回は2月に長崎県美術館で開催予定である。



第31回学芸員研修会（国立西洋美術館）

教育普及研究部会では、例年2回の会合を開催している。しかし、2016年12月の研究部会幹事会において第32回学芸員研修会の企画を当部会が担当することが急遽決定し、その内容を検討する有志メンバーとの準備打合せを優先したため、本稿のび切時点では2017年度会合の開催には至っていない。そのため、2016年度2回目の会合報告及び学芸員研修会に向けた準備の中間報告に充てることをお許しいただきたい。

2016年度第2回（第49回）会合は、2017年2月に大分県立美術館で開催した。同館は2015年の開館以来、多彩な教育プログラムとその活動内容で注目を集めていることもあり、参加者が30名以上集まったが、教育普及グループリーダーを務める榎本寿紀氏は、自分自身が美術館に行く理由や目的を振り返ることから活動方針を明確にし、多くの方法論による実践、検証に注力していた。新たな手法や成功例ばかりが注目されがちな教育普及事業において、目的の重要性を再認識する良い機会となった。詳細な活動報告は全美HPに掲載済みなので、そちらも併せてご覧いただきたい。



第49回会合（大分県立美術館）

年度が改まってからは、学芸員研修会に向けた事前アンケートによる部会メンバーの意見、大分会合2日目の議論をもとに、有志メンバーによる4度の準備打合せ（4月24日、兵庫県立美術館、7人参加／5月24日、三重県立美術館、5人参加／8月30日、横浜美術館、8人参加／10月5日、福岡アジア美術館、8人参加）、メールや電話でのやり取りを経て、今回の学芸員研修会の目的やテーマ、それらを達成するのに適した方法論、必要と思われる外部講師の検討を重ねてきた。全国美術館会議正会員の職員を広く対象とする研修であることを踏まえ、教育普及を担当する職員だけでなく、すべての美術館職員が話し合えるテーマで複数の分科会を開く。教育普及的な考え、方法論に基づいたアプローチを行い、作業や議論を通じて各自の考察を深める機会にしたいと考えている。現在は幹事2名で作成した開催趣意書（案）を有志メンバーに送り、内容を吟味している段階である。

本稿が掲載される『ZENBI』の発行時には、すでに全美HPなどで周知されている頃と思う。案内をお読みいただき、少しでも多くの加盟館職員が関心を抱き、積極的に参加して下さることを願っている。



第1回準備打合せの様子（兵庫県立美術館）

情報・資料 研究部会

鴨木年泰（かもぎとしやす・東京富士美術館）

前回の『ZENBI』11号所収の部会報告以降の主な活動として、2017年2月15日に横浜美術館で事例見学会を兼ねて第46回会合を開催した。

詳細は、全美HPに掲載の小林真由氏（松岡美術館）による会合報告に詳しいが、当日は、横浜美術館の端山聡子氏による発表「資源の蓄積と公開について—教育普及的視点から—」と八柳サエ氏による発表「美術資料センターのこれまでと現在、これから」があり、施設見学が行われた。

端山氏の発表での「美術館が発信する作品情報は、人々の文化・学習活動のインフラ資源であり、人々の活動を活性化させることに長期的に貢献する」という指摘は当研究部会の活動内容とも深く関係する示唆に富むもので、教育普及の活動領域と情報・資料の活動領域を繋ぐ興味深い事例紹介となった。11万冊以上の蔵書を誇る横浜美術館の美術情報センターでは、八柳氏にご案内いただき、作家ファイル、他美術館のエフェメラ資料、和雑誌・洋雑誌、新聞、紀要や洋書、所蔵品目録、自館の企画展カタログ、国内外の展覧会カタログ、美術館ニュースなど充実した資料が整理・収蔵されている様子を見学した。

続く3月には、著作権のある美術品のサムネイル画像をインターネットに掲載可能にする著作権の権利制限を含む「文化審議会著作権分科会法制・基本問題小委員会 中間まとめ」に関するパブリック・コメント募集が実施され、これに当部会として賛同する旨の意見を寄せている。

2017年6月16日に東京富士美術館で事例見学会を兼ねて第47回会合を開催した。こちらも詳細は全美HPに掲載の八柳サエ氏（横浜美術館）による会合報告に詳しいので参照されたい。当日は、東京富士美術館の平谷美華子氏による発表「鑑賞活動におけるアクセスとリテラシーの充実のための情報活用」、筆者による発表「ICタグによる収蔵品及び蔵書管理システムの運用」が行われた。

平谷氏の発表では、2013年より本格的に実施を始めた鑑賞バス運行による小中学校の鑑賞教育活動で4年間で延べ5,000人以上の利用を見るようになり、教員や大学生が美術館の発信する作品情報などを活用し、鑑賞活動に携わるようになっていくことなどが報告された。筆者からはHPにおけるDBを活用した作品情報発信の事例紹介と収蔵品のICタグ管理システムの運用についてハンディターミナルを使ったICタグ読み取りの実例デモを行った。

2017年9月27日には国立西洋美術館にて第48回会合を開催。全美HPに清原佐知子氏（大阪新美術館建設準備室）による詳細な会合報告に掲載されている。本会合では現在国立国会図書館が中心となつて構築が進められている「ジャパンサーチ（仮称）」について、同図書館の徳原直子氏と中川紗央里氏によるプロトタイプ・イメージのデモンストレーションを交えた発表が行われた。質疑応答では活発な意見交換が行われ、部会員より実に様々な意見が寄せられた。情報・資料研究部会として今後も作品情報発信の基盤整備に関する動向について引き続き注目していきたいと考えている。



第46回会合
（横浜美術館）



第47回会合
（東京富士美術館）

小規模館 研究部会

三谷 渉（みたにわたる・田辺市立美術館）

小規模館研究部会では、3年任期で3館が幹事となり、毎年主・副幹事館が交代している。2017年度は田辺市立美術館が主幹事館、刈谷市美術館とリアス・アーク美術館が副幹事館を務めている。2回の会合と1回の研修会の開催を年間の主な活動とし、2017年は5月26日と12月8日に会合を、12月7日に研修会を行った。

2017年の研修会は、和歌山県立情報交流センターを会場にして、「美術館と文学館との連携」をテーマに実施した。文学館は美術館以上に規模の小さな館の割合が高いと思われるが、個性的な活動と綿密な調査・研究及び資料の蓄積を有している館も多い。相互の連携によって、それぞれの活動に新たな展望が見出せるのではないかと考え、また小規模な館が持つ運営上の課題についても共有するものがあれば、今後連携して検討する関係を醸成することも視野に入れて、今回の研修会を開催した。

前半は事例発表とし、美術と文学、双方の分野にまたがる内容の展覧会をこれまでに開催した美術館の担当者3名が、その経験からうかがえた美術館と文学館との連携による活動の可能性や課題についての報告を行った。発表者と題目は以下の通りである。今西彩子（鎌倉市鍋木清方記念館）「泉鏡花生誕140年記念展や地域の観光ウェブサイト制作における文学館との連携」、杉山章子（一宮市博物館）「装丁の展覧会を開催して見えたこと—三岸節子と装丁展を開催して—」、三谷渉（田辺市立美術館）「美術家と文

学者、交流と表現を伝える—智恵子抄展・詩人たちの絵画展を開催して—」。

研修会の後半は「美術館と文学館との連携—これからの展覧会の可能性について—」と題したシンポジウムとし、前半の発表者3名に加えて、文学館の側から新宮市立佐藤春夫記念館館長の辻本雄一氏と軽井沢高原文庫副館長の大藤敏行氏をゲストに招き、それぞれの立場から美術館と文学館との連携に関する諸点について発言、意見を交換した。

2017年1回目の第45回会合は、全国美術館会議総会の翌日、5月26日に鎌倉商工会議所会館の会議室を借りて開き、主に2017年度の計画と2018年度以降の活動について協議した。またこの会合で、新たに2館の加盟が承認され、当研究部会の加盟館は59館となっている。

2回目の第46回会合は、先に述べた研修会の翌日、12月8日に熊野古道なかへち美術館（田辺市立美術館分館）で行い、前日の研修会の内容及び2018年度の計画について話し合った。この会合の後、熊野本宮大社、新宮市立佐藤春夫記念館、串本応挙芦雪記念館の視察見学を行った。

当研究部会の加盟館は、運営母体、設立の経緯なども様々ながら、「小規模」であると自認する館が、共通して抱える問題を討議、研究して各館の活動の展開に寄与することを目指している。今後も長年継続している課題からタイムリーな問題まで、適宜意欲的に取り組んで、美術館の活性化を図りたいと思っている。



小規模館研究部会
第45回会合
（鎌倉商工会議所会館）



研修会
（和歌山県立情報交流センター）

ホームページ 部会

宮武 弘 (みやたけ ひろし・福島県立美術館)

ホームページ部会は、全国美術館会議事務局、委託業者との3者で連携しながら全美HPの運営にあっている。以下、2016年度後半以降の活動についてご報告したい。

まず2016年度下半期の活動としては、同年11月14日に京都国立近代美術館にて第31回会合を開催している。主要な議題となったのは、導入を間近に控えた全美HPの個別ログインシステムについて、作業の進捗状況を報告するとともに、今後のスケジュール(2017年5月1日新システム開始、同年8月31日旧システム廃止)を改めて確認した。また今後の課題と展望として、新システムの機能を生かしたコンテンツづくりをどのように進めていくのか、意見交換を行った。

その後、個別ログインシステムが予定どおり2017年5月より稼働したことは、第66回総会の部会活動報告でもお知らせしたとおりである。10月末現在、正会員386館のうち9割近い会員館が新規登録作業を終え、新システムへの移行を完了している。当初想定していた以上にスムーズな移行を果たすことができたのはひとえに皆様のご協力のおかげであり、この場をお借りして御礼を申し上げる次第である。

続く2017年度上半期の活動であるが、5月26日、神奈川県立近代美術館会議室において第32回会合を開催した。今回のシステム移行を踏まえて、次の課題となるのが全美HPにおける個人会員及び賛助会員の取り扱いである。現状、サイトのコンテンツには「一般」と「正会員」の2段階の区別がなく、個人・賛助会員とも「一般」権限での閲覧となっているが、新システムによって、機能的には「個人会員」「賛助会員」を加えた4段階の権限設定が可能となった。ただし今後、個人会員・賛助会員の閲覧対象をどこまで拡大するかは、理事会をはじめ、事務局、及び研究部会全体での調整が必要であり、今後検討を進めていきたいと考えている。もう一つ、機能面の進化で言えば、発信者を明示した形での双方向型コンテンツを設けることが可能となった。具体的にはフォーラムや掲示板のような会員相互の情報交換の場が想定されるが、これについても次回以降の会合での検討を深めていきたい。

このようにホームページ部会では、よりよい全美HPを目指して部会員一同、鋭意活動中である。部会員は随時募集しているので、ご興味のある方はぜひご一報いただきたいと思います。



第32回会合(神奈川県立近代美術館)

機関誌部会

尾崎信一郎 (おさき しんいちろう・鳥取県立博物館)

機関誌部会ではこの1年の間、予定通り『ZENBI』の第11号(2017年1月31日発行)と第12号(2017年8月1日発行)を発行した。2016年12月1日と2017年7月29日に二つの号の編集会議及び校正の作業を部会として開催した。『ZENBI』もすでに12号の発行を数え、順に並べると背表紙のグラデーションが美しい。取り扱う美術館のショップも随分増えて、一般の人の手にも届きやすくなったと感じる。ただし2016年度の販売実績は95冊であり、ほぼ横ばいの状態が続いている。一方、広告掲出はやや減っており、事務局とも相談のうえ、賛助会員各社に働きかけたいと考えている。

今回特筆すべきは、美術館運営制度研究部会からの要望に基づいて、第11号に「美術館の原則と美術館関係者の行動」の第9草案を掲載したことである。実は本誌はこの問題に早くから関わり、2012年に発行された第2号で福島県立美術館の酒井哲朗元館長より以前とりまとめられた「美術館基準(案)」の顛末、原美術館の安田篤生氏よりICOMの「博物館倫理規程」についての報告を掲載し、続く第3号でも今回とりまとめの中心としての役割を果たしていただいたブリヂストン美術館の貝塚健氏による「サステナビリティのゆくえ」というエッセイ、さらに

2014年の第6号では国立国際美術館の山梨俊夫館長と宮城県美術館の大嶋貴明氏より現在進められている行動基準及びかつて進められた基準(案)について、それぞれの思いを寄せていただいた。この問題は総会では議題となるが、総会に参加しない美術館関係者にとっては必ずしも切実さをもたない。そこで採択が予定されている今年の総会の事前にその全文を本誌に掲載して、その趣旨と内容について周知をはかった訳である。総会では圧倒的多数で採択されたとはいえ、批判の声があることは知っている。今後もこの問題を深めていくうえで本誌は開かれた議論の場を提供したいと考える。この話題に関連して、今号の美術フォーラムには静岡県立美術館の木下直之館長より寄稿いただいた。

『ZENBI』ではこれから全国美術館会議で主体的に取り組んでいる課題については、適宜関連する記事や載せ、議論を巻き起こしたいと考えている。かつての美術品補償制度の問題がそうであり、今回の「原則と行動指針」も同様の問題である。おそらく各研究部会においても全体に諮りたい様々なテーマを抱えていることと思う。本誌はそのようなアピールの場でもあり、そのためにも各部会におけるより活発な議論、そしてより積極的な投稿をお願いしたい。



第22回会合(京都国立近代美術館)



第23回会合(京都国立近代美術館)

美術館運営制度 研究部会

貝塚 健（かいづか つよし・石橋財団ブリヂストン美術館）

2017年5月、鎌倉で開催された第66回総会で、当部会が5年越しで取り組んだ「美術館の原則と美術館関係者の行動指針」（以下「原則と行動指針」）が採択された。一仕事をやり終えたというよりも、ようやく一歩を踏み出したという感が強い。この1年を振り返ってみたい。

機関誌部会のご配慮によって、2017年1月刊行の『ZENBI』11号にその第9草案が掲載され、会員館にお諮りした。このときは、「美術館の原則と美術館関係者の行動」というタイトルである。2016年総会で第8草案の「……行動基準」がきな臭い恐怖を与えたと批判があり、「基準」を取り除いたものだった。この草案へも様々なご意見が寄せられる。「……行動」では反って分かりにくいというご指摘があったし、2000年の美術館基準案作成を担った大嶋貴明氏（宮城県美術館）から有意義なご指摘と励ましがあった。また、新任のある公立館副館長から、日本博物館協会版の規範を元にするのではなく、全国美術館会議独自に基準をつくりあげべきだというご批判もあった。行政職ご出身のこの方と、メールで濃密な意見交換を繰り返したのも忘れがたい。

こうしたご意見をそのまま集約することは不可能である。だができる限り包括的な成案を得るべく、3月27日に我々は第26回会合をもち、5月の総会へ提出する第10草案の練り上げにあたった。まずタイトルを「……行動指針」とする。また、まえがきを整理し全体構成をシンプルなものにした。表現が読みにくいという批判に応えるため、細かい文言の加除訂正は数十カ所に及んでいる。さらに、総会において、この「原則と行動指針」は部会からの提案ではなく、理事会提案としてご審議いただくことにした。その後改訂作業が続 き、4月下旬に最終草案が完成。総会1ヶ月前に理事会へ提出することができた。

5月25日の総会では、15分の予定が45分を超えて議論は紛糾。議論する度に毎回とびだす意見は、「時

間をかけてもっと広く検討すべきだ」というものである。どの段階の草案を提示しても、そのとき初めてそれを知って驚き、「待った」をかける人間がいる。筆者は、総会に出席するからには前年の総会報告書ぐらゐ目を通しておいてほしいと思うのだが、実際はそういう人は少ない。批判的意見が続いてから、今度は賛成意見、あるいは明文化された規範の必要性をあらためて訴える主張が会場からこぼれだした。議長の神奈川県立近代美術館水沢勉館長の巧みな舵取りによって、最終的に参加者で挙手により議決をとることとなる。蓋をあけてみれば、圧倒的多数で採択されたのには、正直ほっとした。

その後も部会にはいくつかのご意見が寄せられている。総会で反対意見が出たことから「もう1年、議論を続けるべきだ」というもの、部分的な修正提言もあった。7月21日、我々は参集し（第27回会合）結論を出す。総会で採択された事実を重んじ、建昌哲会長長の承認を得たのちにそのまま改訂せず全国美術館会議として発表するというものである。9月11日、全美HPに「原則と行動指針」は掲載された。10月10日には国立西洋美術館で建昌哲会長と山梨俊夫副会長兼部会長によるプレス発表を行う。メディアはいずれも好意的で、早速、ウェブ版美術手帖、毎日新聞、朝日新聞、日本経済新聞が取り上げてくれた。

11月現在、我々は「原則と行動指針」の小冊子刊行を進めている。これには日本博物館協会版の行動規範、ICOM職業倫理規程、博物館法などもあわせて収載し、関係者に行きわたる十分な部数を制作するつもりである。本号発行の頃には、皆様のお手元に届いていることと思う。

地域美術 研究部会

藤崎 綾（ふじさき あや・広島県立美術館）

地域美術研究部会では、全国の地域美術に関する調査・研究の情報交換と学芸員の相互協力を図るという基本方針や目標のもと、今年度も活動を行った。

第6回会合は、5月26日に横須賀美術館で開催し、「横須賀美術館と地域ゆかりのコレクション—現代作家を中心に」と題した工藤香澄氏の発表があった。開館前に寄贈された朝井閑右衛門の作品、匠秀夫氏の蔵書、谷内六郎作品をコレクションの基部として、時に展覧会の開催も契機としつつ、郷土ゆかりの作品を収集してきた経緯が報告された。地域美術との関わりで特に注目された展覧会活動は、2013年開催の「街の記憶」展である。多くの美術館と同様、同館も郷土に取材した作品を収集対象としているが、軍港という歴史ゆえに、横須賀の地が一般に作品の主題になることは戦後を迎えるまでなかったといい、展覧会活動を通じて地域美術の特性が浮かび上がった事例報告であった。

第7回会合は、11月30日～12月1日に、徳島県立近代美術館、香川県立ミュージアム、高松市美術館で開催した。1日目は、「徳島県立近代美術館の取り組み」と題した江川佳秀氏の事例発表があった。地元作家の掘り起こしを重ね、開館27年で15本の地元作家の特別展の開催実績がある同館では、ゆかり作家のなかでも特に注目する主要作家に限り多数の作品や資料を収集しているという。続いて特別展「廣島晃甫展」の会場で、展覧会を担当した森芳功氏から、同館の廣島晃甫に対する取り組みについて発表があった。また、収蔵庫で、同じく主要作家の一人と位置づける山下菊二の膨大な資料の整理状況を見学した。収蔵や整理作業のスペース、時間や整理方法など、一般に資料整理には多くの課題が付随するが、「作品を生む“思索の過程”がわかる」という資料研究の成果と意義が体験を踏まえて提示された。

2日目は、一柳友子氏（香川県立ミュージアム）と毛利直子氏（高松市美術館）の発表があった。香川

県立ミュージアムでは、地元作家に主眼を置く方針のもと行ってきた収集活動の経緯と、今後の美術館活動に合致したコレクション形成に向け、数年前に行った全国アンケートの結果も参考に収集方針を策定中との報告があった。一方、高松市美術館では、ゆかり作家の個展や、瀬戸内国際芸術祭の連携企画と位置づけた、ゆかり作家を含むグループショーなどを通じて地元作家の顕彰を続けてきた事例が報告された。近接する両館だが、地域美術の収集について、「住み分け」など意識的な差別化は行っていないといい、いずれも香川の漆芸・金工作品を所蔵する。香川県立ミュージアムの活動だけでなく、屈指の日本の現代美術コレクションを持つ高松市美術館においても、ここ数十年に開催したゆかり作家の個展の大半が工芸作家であり、また展示室で常時「讃岐の漆芸」を展開するといった活動からは、明治期に創立された香川県立芸芸学校の存在の大きさが明瞭になった。発表後の協議でも同校にふれた意見が多く、香川の美術が（絵画ではなく）工芸を軸として形成されていった独特の地域性についての言及もあった。あわせて、継続課題である、地域美術研究の現状を知るためのアンケートの実施についても協議を行い、いくつかの視点が提案されたが、効果的なアンケートとなるよう引き続き調査項目を検討していくこととなった。



第6回会合（横須賀美術館）



第7回会合（徳島県立近代美術館）

全国美術館会議の活動は以下の賛助会員各社の支援を受けております。
会員各社のお名前を記して、心より感謝を申し上げます。

アート印刷 (株)	(株) 生活の友社「美術の窓」「アートコレクターズ」
(有) アートフリース (大阪美術)	(一社) 全国美術商連合会
(株) アート・ベンチャー・オフィス ショウ	(公財) ダイキン工業現代美術振興財団
(株) アトリエリーブ	大日本印刷 (株)
(有) イー・エム・アイ・ネットワーク	(株) 丹青研究所
イカリ消毒 (株)	(株) TT トレーディング
イセ文化財団	(株) DNP アートコミュニケーションズ
(株) 印象社	(株) 東京美術
AGC グラスプロダクツ (株)	(株) 東京美術倶楽部
(株) NHK エデュケーションル	凸版印刷 (株)
(株) NHK プロモーション	(株) トップアート鎌倉
M&I アート (株)	トライベクトル (株)
影山 幸一 (アートプランナー・デジタルアーカイブ)	日油 (株)
(株) 加島美術	日本写真印刷コミュニケーションズ (株)
カトーレック (株)	日本通運 (株)
(公財) かながわ国際交流財団 湘南国際村学術研究センター	(株) 美術出版社
(株) ギャラリーためなが	美術年鑑社 新美術新聞
(株) 求龍堂	ピープルソフトウェア (株)
(株) キュレイターズ	(株) 伏見工芸
協同組合 美術商交友会	ホーチキ (株)
(株) グッドフェローズ	(有) 丸栄堂
(株) クレヴィス	ヤマトロジスティクス (株)
慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科 高精細映像活用プロジェクト	(株) ユニークポジション
(株) 廣濟堂	読売新聞東京本社
JOPD (株)	ライトアンドリヒト (株)
(株) 集英社	(株) レンブラント
	早稲田システム開発 (株)

(50 音順)

事務局から

行動指針、災害対策委員会、メキシコ地震のこと

企画担当幹事 前山裕司 (まえやま ゆうじ・埼玉県立近代美術館)

2017 年の全国美術館会議で最も大きな出来事といえば、「美術館の原則と美術館関係者の行動指針」(以下「原則と行動指針」) が第 66 回総会で採択されたことでしょう。10 月 10 日にはプレス発表も行われ、美術館関係者でない人からもこの話題を持ち出されるなど、少しずつ認知されつつあるようです。「原則と行動指針」については『ZENBI』今号の記事だけでなく、作成に着手する発端や推敲の歴史も記載される冊子を配布することで、さらなる広がりを見せると思います。

奇しくも、総会直後の 6 月に改正された文化芸術基本法では、「文化芸術の固有の意義と価値を尊重しつつ、観光、まちづくり (中略) その他の各関連分野の施策との有機的な連携を図られるよう配慮」という視点も盛り込まれ、文化芸術の活用に向けて舵が切られたようにみえます。「基本法」で義務づけられている、「文化芸術推進基本計画」の策定も進みつつあるようですが、激しく動き始めた状況の中で、「原則と行動指針」が美術館のよりどころとして、イカリのように働くことを期待したいところです。

「原則と行動指針」に続くトピックとしては、同じく総会において「災害対策委員会」が「東日

本大震災復興対策委員会」に代わって発足したことです。東日本大震災の復興事業を継続しつつ、今後起こるはずのさまざまな災害に対応することができるようになったことは、大きな一歩といえるでしょう。

勤務先の話題で申し訳ありませんが、埼玉県立近代美術館の「ディエゴ・リベラの時代」という展覧会では、9 月に起きたメキシコ地震の影響を受けました。メキシコ・シティが被害に見舞われた 2 回目の地震では、一時は空港も閉鎖され、開催できるか心配される状況になりました。共催者であるメキシコ文化省／メキシコ国立芸術院 (INBA) の担当は、文化財レスキューも担う部門で、地震の対応に追われながら、集荷に尽力してくれました。輸送便の日程が変更になる事態でしたが、予定していた全作品で初日を迎えることができました。ただし、図録への影響は大きく、被害を受けた写真センターからは参考写真が提供されず、また翻訳者の家が被災するなどの理由で発行が遅れました。

今更ながら、地震に限らず災害が突然襲いかかること、起こってしまった災害に対しては冷静に、多くの方が協力して対応することが必須と実感しました。

編集後記

『ZENBI』の13号をお届けする。本誌では過去に継続的に取り上げてきた話題がいくつかある。震災や噴火といった天災に関する報告、各地での芸術祭や国際展の話題と並んで、美術館の倫理規程をめぐる文章も過去に何度か「全美フォーラム」に掲載した。今年の総会で「美術館の原則と美術館関係者の行動指針」がようやく採択されたことは既報のとおりである。かつて全国美術館会議の積年の課題として実現した美術品補償制度に関して第8号でその問題点と可能性を検証したように、この問題についても成立に一石を投じた当事者として、本誌は今後も折りにふれて誌面で取り上げたい。

今号のフォーラムではゲスト・キュレーターとカタログの単行本化について寄稿をいただいた。前号で取り上げた建築家やデザイナーとの協同と同様、これらはいずれも学芸員の仕事のアウトソーシング化であり、めざましい成果を上げていることは寄稿いただいたエッセイに詳しい。欧米の美術館のように学芸員の職能が専門化、分業化されつつあるとみるか、もはや日本の美術館では一人の学芸員がこれらを統括する余裕がなくなりつつあるとみるかは微妙な問題であろう。本誌では今後も現在の美術館と学芸員が置かれた状況を象徴する話題を取り上げ、本誌しかありえない切り口で美術館が抱える問題に光を当てていきたい。(O)

『ZENBI』では、
次の要領で広く皆さんからの
原稿をお待ちしています。

- | | |
|-----------|---|
| 〔原稿の内容〕 | ・展覧会、普及活動など美術館の活動に対する批評を受けつけます。
・原則として具体的に対象を限定した批評をお寄せください。
・原稿には表題を付してください。 |
| 〔投稿の資格〕 | ・全国美術館会議に所属する美術館博物館の職員であればどなたでも投稿できます。
・匿名の投稿は受けつけません。 |
| 〔投稿に係る詳細〕 | ・原稿の形式、許諾、著作権等については投稿規定を参照ください。 |
| 〔締切〕 | ・第14号(2018年7月発行予定)については4月30日、
第15号(2019年1月発行予定)に関しては10月31日を締切とします。(当日必着) |
| 〔提出先〕 | 〈メールの場合〉 s-osaki@pref.tottori.jp (尾崎)
aoyama@ma7.momak.go.jp (青山)

〈郵送の場合〉 〒606-8344 京都市左京区岡崎円勝寺町 京都国立近代美術館内
全国美術館会議機関誌部会 幹事 青山杏子 |
| 〔問い合わせ先〕 | 内容に関する問い合わせについては下記まで御連絡ください。
〒680-0011 鳥取市東町2-124 鳥取県立博物館内
全国美術館会議機関誌部会 幹事 尾崎信一郎 |

ZENBI 全国美術館会議機関誌 投稿規定

1. 全般事項
(1) 本誌への投稿者は原則として全国美術館会議会員館職員に限る。
(2) 投稿原稿は他誌(電子媒体を含む)に発表されていないものに限る。
(3) 原稿(写真を含む)は原則として電子メールで提出すること。
(4) 原稿は原則として2,000字程度とする。
2. 投稿文の採否
(1) 投稿文の採否、掲載順などは全国美術館会議機関誌部会(以下「部会」という。)に一任とする。
(2) 掲載が決定した場合は、その旨を投稿者に通知する。
3. 原稿について
(1) 原稿は原則として常用漢字を用いることとし、である調とすること。
(2) 引用した文献は、本文中において該当箇所の右肩に順次番号をつけ、その番号を引用順に列挙すること。
(3) 個人を特定しうる顔写真等を掲載する場合は、本人等の承諾を必ず得ること。
(4) 投稿文にはできる限り画像の掲載をお願いするが、著作権許諾及び著作権料の支払いが必要な場合は投稿者が責任を持って処理すること。
4. 校正について
校正については、初校をもって著者校正とする。その後は部会の責任とする。
5. 著作権について
(1) 本誌に掲載された投稿文の著作権は全国美術館会議に帰属するものとする。
(2) 掲載後の投稿文について著者自身が活用するのは自由とする。ただし、出典(掲載誌名、巻号ページ、出版年)を記載するのが望ましい。
6. その他
(1) 原稿料は支払わない。
(2) 掲載投稿一編につき、本誌5部を進呈する。



私たち加島美術は美術商として欠かさない「真美眼」と「審美眼」を研ぎ澄まし、日本美術の国内外への普及と発展のために尽力しております。そのフィールドは由緒ある古美術から新進気鋭の現代作家まで、日本美術の多岐のジャンルに及びます。

加島美術

〒104-0031 東京都中央区京橋3-3-2
tel: 03-3276-0700 fax: 03-3276-0701
mail: info@kashima-arts.co.jp